

子育ての輪

はるにれの会

榎田 二三子

「おかあさん、大好きよ。」と、しがみついてくる娘。ずっしりと重い娘を抱きかかえる私。「ずるーい。おねえちゃんばかり。」と、くっついてくる下の娘。我家でよく見られる光景です。今、大好きと言ってくれている娘たちには、おかあさんというのが、どんなイメージなのでしょう。

私にとって母は、といえますといつも背中を見せていた人のように思います。引越してすぐ入った幼稚園で、「おかあさん待っていて。」とたのむのに、いつの間にか帰ってしまった母。家族で山登りに行くと太ってい

た私は、いつもビリ。「待って」と泣きながら登ったこと。生活することも自分の趣味も一生懸命に前進する人です。そのこと自体は、とても素晴らしいことなのですが、子どもである私は常に、私の方を向いてくれない、私の気持ちと違う、こんなのお母さんなんて言えない、お母さんはもっと違うものだ、と現実の母を否定しつづけてきたのでした。ところが、現実には母となり子どもたちを育てていると、自分の母と同じようなことをしているのに気づきます。自分が否定しつづけてきた母と同じ……と思うと同時に、私にとっての母は、私がいやだと思ってきた母こそ母なのだと思わざるをえません。とすると、娘たちにとっての母は、まさに私なのです。今回は、そんな私がいまわりに支えられてきた、母親としての歩みを書いてみたいと思います。

〈仕事をやめる〉

子どもが生まれても仕事を続けるつもりでいた私でしたが、子どもが生まれて半年後から約一年間、父親が単

身赴任でいなくなるとわかり迷いました。子どもが病氣になったら、私が寝こんだらと、不安や心配はつきません。産休に入るぎりぎりまで迷いましたが、のんびり子育てをするのもいいかもしれないと思い、やめることを決めました。ちょうどその頃、友人とかわした会話の中で、「充電期間もいいかもね。」と言われ、子どもが生まれるからやめるというだけでなく、充電期間というところが与えられ、その言葉に大いに支えられ、私なりに落ち着いたのでした。

〈井戸端会議に入れない〉

仕事をしていた時には、朝、家を出て夕方帰る生活です。近所の人とは、ほとんど顔をあわすことがありませんでした。おまけにマンションでしたので、ドアを閉めてしまえば、隣は何をする人ぞという感じでした。こんなありさまであるので、子どもを抱いて歩いていても、あいさつをかわしたり立ち話をする相手がありません。よそのお母さんという、子どもそっこのけでお

しゃべりに花をさかせています。私は、それをしらっと見ていました。何をそんなにくだらないことをべちゃくちゃしゃべっているのかしら、時間の無駄だわとか心の中で思いつながらいるのですから、そこへ入っていくことなど考えられませんでした。ところが、井戸端会議をよくやっている今になって思いますと、確かにくだらないことも多いのですが、このくだらないおしゃべりの合間に、子どものおやつ作り方とか、小児科はどこがいいとかいった情報がたくさんあったのです。

核家族に育ち、核家族で生活している私たち都会人にとって、子育ての手助けは育児書と自分が得た情報と、そして身近なところにいるお母さんたちでしょう。お母さんたちというのは、体験を通して話してくれますので、面倒臭いこともあります、その中から自分が必要なることをピックアップしていけば、この井戸端会議も捨てたものではないのです。この頃は、お役所が井戸端会議を作ろうなんていう動きすらあるようですから。

というわけで、子どもが生まれて半年近くは散歩に行

く以外は、ひっそりと家にこもってくらしていました。

〈花屋のえり子さん〉

えり子さんは、我家のあったマンションの下で花屋さんをやっていた人。我家の娘と一日違いで三人目の子どもを出産しました。しばらく他の人にまかせていた店を、子どもが半年近くになり再開しました。この花屋さんには、仕事帰りによく立ち寄りしたので、どっちのおなが大きいとか立ち話をしていました。ですから、子連れで店に出始めたえり子さんのところへ私も子どもを連れて出かけるようになりました。ちょうどこの頃には、我家は父親の単身赴任に伴い、母子家庭になっていました。一週間近くおとなとしゃべる機会がありませんと、しゃべりたくなり、私も思ぬきのおしゃべりに出かけました。時には、夕方もう皆が家へ帰った頃、娘をおんぶし、店じまいをしているえり子さんのところへおしゃべりをしに行き、ほっとひと息ついて帰ってくることもありました。

離乳食についても、肩ひじ張って頑張っている私に比べ、のんびりしているというか、手をぬいているという

か、私とは対照的に落ち着いているえり子さんでした。

私が、さあ今日これだけ作ったんだからねと離乳食を用意し、さあ食べてと差し出したスプーンを見ただけで、

(とは言ってもスプーンを持っている私の顔も真剣だったのしょうが)泣きだすようになってしまった娘に、いいかげんいやになり、えりさんの所へこぼしに行きました。えりさんの話を聞いて、ああ頑張るのやめたと思ったその次から、娘が食べるようになり、育児ノイローゼにならずにすんだのも、えりさんがいてくれたからと、助けてくれる先輩お母さんに感謝するのでした。

〈ひとりふたりみんな〉

えりさんところで立ち話をしていますと、お店のお客さんで子連れのお母さんたちとも話をする機会がでてきました。そんなことから話べたながら、井戸端会議

へも加わるようになり、よその家へ遊びに行くようになりました。

子どもたちは、ひとり遊びの時期から、二〜三人で遊び始め、そしてもう少し大きい集団で遊び始めますが、ここまでの私も同じような経過でした。この時友だちになった人達は、皆第一子の子育て中という人たちで、彼女たちもきっと、仕事の手を動かしながら、おしゃべりにつき合ってくれるえりさんにきつと受けとめられ、支えられていたことだろうと思います。

〈助け合い子育て〉

少しずつ娘の友だちもでき、行き来が始まったところで、我家は引越しをしました。新しいマンションで、近所づきあいゼロからの出発です。ところが、うれしいことに我家から歩いて数分のところへ、えりさんが引越してきました。新しい生活の場で、新しい人間関係を築いていくのは、とてもたいへんなことです。まだ、そんなエネルギーを持ち合わせていなかった私は、時々え

り子さんの所へ立ち寄り、おしゃべりをしていました。

マンションでのおつきあいは、どうなったかといいますが、隣の子どもが同じ年齢でしたので、雨の日など呼ばれ、どんなおかあさんかしらと思いつながら伺ったり、また我家へ呼んだりと交際が始まりました。隣の奥様桐子さんは、公園へ出かけた折にも新しく友だちを作ってくるなど、人間関係をつないでいくのが上手な方でした。いつの間にか、私も誘われ、四大家族でお昼を食べたりするようにになりました。その間、一歳〜四歳の子どもたちは、子どもたち同志で遊んだり、誰かのおかあさんに本を読んでもらったりして過ごします。ミニ共同保育をやっているようなものでした。私にとっては、お母さんたちとおしゃべりのひと時は、半分は母親、半分はひとりの女であり得る息ぬぎの時でした。

この時期は、四大家族とも小さい子どもが二人いて、どこに行くにも連れて歩かねばならない時でした。買い物には連れて行っても、病院となると元気な子は置いていきたいものです。そんな時、四大家族いますと、どこか

預かってもらえ、とても助かるのでした。お互い様という気持ちがあればこそ、この助け合いは気持ちよく成り立っていました。

桐子さんを中心としたこのグループは、強力な助っ人でした。私が熱をだしてダウンしたりしますと、「ごはんだけ焚いといてね。あとは運んであげるから。」と言ってくれるのでした。悪いと思いつても待っていますと、おかずから、つけもの、味噌汁、おまけにデザートまでつけて運んできてくれました。桐子さんの細かい気配りに感謝すると同時に、ちょっと重たるくも思うのが本心でした。けれども、桐子さんの「私も前のマンションでやってもらってきたのだから。あなたもどこかで自分ができる時に誰かにやってあげればいいのよ。」という言葉に、ああそうか、今私はあまりできないけれど、どこかで、できることがあったらやってあげれば、まわりまわっていくんだなと思ひ、気分が少し軽くなりました。

この四大家族のこの時期は、お互いがお互いの助けを必

要としていた時でしたので、関係が気持ちよく成り立っていました。子どもが幼稚園、小学校と進み、そう助けはいらなくなり、また身近すぎて腹をわって話せないことが出てきたりすると、お互い様でなくなってしまいました。子どもから離れ、ひとりの時間もできてきますと、皆が集まっておしゃべりをする意味もなくなり、全員が集まることもなくなります。共同保育が必要とされているところにでき、それがまた終わりになっていくのを見ますと、このグループも小さいながらも共同保育、助け合い子育てだったのです。

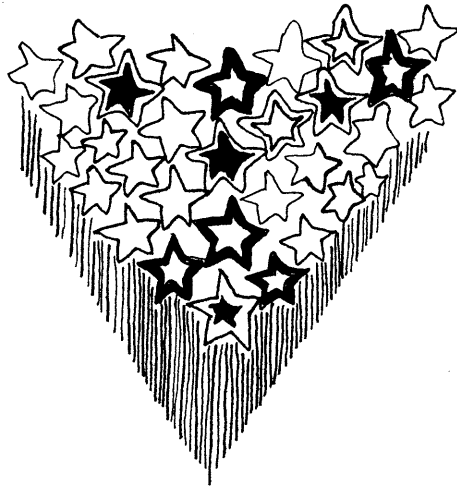
〈井戸端会議を越えて〉

助け合い子育ての頃、私は第二子の妊娠、出産、子育てと忙しく、ふたりの子どもを連れて出かけることはとてもできない状況でしたので、地域での生活をじっくり過ごしていました。下の娘が一歳になり、食べることや昼寝の時間が幼児に近くなったため、連れて出かけるのも容易になりました。そうしますと何かやりたい、動き

だしたいとむずむずしていた虫がおき、結局、大学の子連れ研究会、はるにれの会の事務局の集まり、はるにれの会主催のプレールームと月六回程、都心へ通うことになりました。今思いますと、ひとりをおんぶし、ひとりの手をひき、片道一時間以上かかってよく行ったと思います。行きはよいよい帰りが怖いで、ひとりは背中で昼寝、上の娘はねむくて階段が登れなくなり、どうにもならなくなると、おんぶに抱っことなります。こんなに大へんな思いをしてまで、なぜ通ったのでしょうか。

上の娘が二歳四か月から一年間、地域の共同保育に参加しました。公園での遊び、お散歩、運動会、クリスマスなどの行事と子どもたちと楽しく過ごしました。楽しいのですが、私としては何かもの足りないのです。いつもの井戸端会議の域を越えられないからでしょうか。ここで、同じ基盤を学んだ人々と、もう一度出会いたい。エネルギーをリフレッシュしてから、再び地域にもどって共同保育に参加しようと思ったのでした。

はるにれの会の集まりは、集まる方々の魅力に引き寄



せられていました。はるにれの会の集まりでは、それぞ
れの日常をかかえながら、日常からちょっと離れたこの
場で言えることもあるし、違う場で違う顔ができること
で生き生きすることもありました。

大学で子どものことを学び、仕事も子どもに関係して
いて、少しは、わかつているつもりでいたりします。
(これが、大きなまちがいの素になったりするのです
が。)頭では、わかつていても生活の中では、どうにも
ならない場面があります。子どもたちも私も、一日の終
わりはくたびれ、さっきまでは、あんなに元気に遊んで
いたのに、寝るしたくとなると泣き始めたり、ぐずぐず
します。そんな子どもたちの気持ちをちょっと元気にし
て、のせてあげれば、ルンルン気分で動き始めるのはわ
かっていても、一喝してしまったりします。ますます、
こんがらがった子どもたちを前に、あーまたやっちゃっ
た、となるわけです。そんなことを会のメンバーに話し
てみると、今ここでは、穏やかに話している人も、家では
私と同じようなことがあると聞き、みんな同じなのだ

と安心するのです。

会のメンバーの子どもたちとのかかわりを見て感じ入り、そして常に前進し生き生きしている姿にひかれ、けれども、やっぱりみんな同じ母親なのだとも思い、二重にながれることをうれしく思っているのです。

〈子育ての輪を作る立場へ〉

三年前、新潟へ引越しました。それまで三十年間、東京近辺に住んでいましたので、友人たちもほとんど関東です。それが皆遠くなってしまい、また新しい土地でゼロからの出発でした。共同保育や児童館などを探してみましたが、これといったものがなく、自分で作っていくより他ありませんでした。社宅内での行き来、お散歩会、冬の間の我家開放デー、親子劇場、自主保育グループ作り、そんなステップを踏んで、今、動いています。

子どものことや子育てで何か悩む時は、よいことで悩む人は少ないでしょう。困ったなと思って悩みます。自

分が悪いのか、子どもがどこか変わっているのか、今までの育て方が悪かったのかと思います。けれども違うのですよね。それぞれの歩いている道筋が違うだけで、みんな山あり谷ありの道を歩いていると思うのです。高い山を簡単に越えてしまう人もいれば、長い時間かかる人もいるかと思えば、まわり道をする人もいます。

高い山を越えられても、谷を渡れない人もいるかもしれません。そんな時、困っちゃったと言って、受け止めてくれる人がいて、とても助けられてきました。そんな人たちがいてくれて、ここまでできました。

これまでの子育ての輪は、その場で終わらず、うれしいことに人の輪となって私のまわりに残っています。頼りない母親である私だけでなく、母親を支えてくれているその人々をひくるめて、我家の娘たちに見つめていてほしいと思います。